田中家住宅 1

田中家は、戦前は軍用馬を100頭以上育てていた山持ちの豪農でした。田中家住宅は主屋、米蔵、住宅門が国登録有形文化財に指定されています。

洋風の望楼を持つ住宅主屋は、明治23年に建築された造り酒屋と洋風の消防屯所のイメージが融合した、和洋折衷の近代和風建築です。米蔵は、主屋よりも古い時期に建てられたと伝えられています。

剣吉城跡 2

南部氏の重臣であった北信愛の居城でした。築城時期は不明で、北家は「奥南旧指禄」によると、南部氏3代・時実の四男、政実が祖とされています。北信愛は南部信直・利直の側近として活躍しました。

相内観音堂(相内館) 3

南部家の始祖・南部光行が糠部に入部した際、初めて宿をとったという伝承があります。伝承では、建久2年(1191)南部光行は、八戸に到着した後、馬渕川沿いに西へ向かい、この観音堂で一夜を過ごしたとされています。その後、付近の豪農助左衛門の屋敷を借上げ、家臣村人総出で一夜のうちに堀を巡らしたというので、一夜堀館ともいわれています。

現在確認されている郭には神明宮と民家とが立ち並んでおり、境内には当時のものと見られる土塁、東西には出入口を思わせる箇所も遺されています。糠部三十三観音の17番札所として信仰を集めています。

三光寺 4

福寿山三光寺は臨済宗の寺院で、聖寿寺館跡の北側に位置しています。当時は南部氏の菩提寺である聖寿寺、東禅寺、三光庵がありましたが、南部氏が盛岡に移った時点で三光庵(寺)が菩提寺として残りました。

境内には南部26代信直夫妻の墓所(町史跡)、南部27代利直の霊屋(県重宝)、利直の四男利康の霊屋(国重文)、南部2代実光の墓所などがあります。なお住職の墓地には中世後期の宝篋印塔の一部分があり、寺の歴史を物語っています。

【南部利康霊屋】

寛永9年(1623)、南部利康を弔う為、三光寺境内に建立されたもので、江戸時代初期の豪華絢爛なる桃山建築の様式がそのままに取り入れられ、華麗なること東北随一と賞されています。昭和42年から3年にかけ、外回りの大修理をし覆堂を改築しましたが、それによって分かったことは、用材は全て木曾産の檜であり、しかも最高級の用材ばかりが選ばれていたことです。領内の鹿角郡に金山が発見され、南部家の財力が最も豊かな時でしたので、金にあかしてこの用材を求めたことがうかがわれます。昭和28年に国の重要文化財に指定されました。

【南部利直霊屋】

この霊屋は、雄大な桃山遺風とともに、室町時代末期の面影をも残している江戸時代初期様式による典型的なものといわれています。

様式的には、重要文化財の南部利康霊屋よりも一段と古いものとうかがわれますが、建立年代としては、寛永9年(1632)の利直の没年からそれほど離れたものではないと考えられています。

【南部信直夫妻の墓所】

向かって左が南部信直のお墓で、右が信直の妻(南部利直の生母)のお墓です。地方色を帯びた、独特の宝篋印塔であるといわれています。「前光禄太夫江山心公大居士」「廿六代太守信直公」「慶長四(1599)天己亥十月五日化」と刻まれています。

信直は戦国時代から安土桃山時代にかけて、南部氏26代当主として活躍し、天正18年(1590)、豊臣秀吉から南部氏領全体の所領安堵の朱印状を得ました。南部盛岡藩の基礎を築いた人物として南部氏中興 の祖ともいわれています。

聖寿寺館跡 5

聖寿寺館跡は、14世紀末頃から三戸南部氏の本拠地とされていました。天文8年(1539)家臣の放火により焼失し、現在の三戸城に移ったとされています。館が焼失した際、同時にたくさんの古文書も焼失したとされ、創建時の様子は後世の記録や伝承によってしか知ることができませんが、南部町には、南部氏に関連する城館や藩主の墓、霊廟などゆかりの文化財が数多く残されています。

史跡聖寿寺館跡では、聖寿寺館跡本体のほかに、南部氏の菩提寺のある三光寺地区、氏神である本三戸八幡宮地区の3地区で構成しており、その歴史的重要性が認められ、平成16年に国史跡指定を受けました。

古町隅ノ観音 6

糠部三十三観音の24番札所。本三戸城(聖寿寺館)の元の城下を「古町」と呼び、古町の角(すみ)にある観音堂だったので古町隅ノ観音と呼ばれるようになりました。

本三戸八幡宮 7

聖寿寺館跡本体の南方、馬淵川沿いに横たわる台地上に構築されています。天正6年(1578)に南部信直が営んだ館跡といわれていますが、聖寿寺館跡が放棄される以前から存在した防御施設と思われます。それはこの館跡の東側先端部に南部氏が甲州から勧請した本三戸八幡宮があるほか、南部23代安信の墓所(県重宝)が残されています。なお、後背部に南部氏累代の墓所がありましたが、馬淵川の侵食により消失したと伝えられています。北側にある神官の墓地には宝篋印塔の一部が残っており、中世後期のものと推定されます。

【南部安信の墓(宝篋印塔)】

聖寿寺館(本三戸城)の館域にある南部23代安信の墓で、室町時代後期に造立され、南部氏歴代の宝篋印塔のうち最古のものと考えられます。安信は南部氏を戦国大名に押し上げた人物で、津軽で起こった家臣の反乱を鎮圧すると、一門を郡代や城主として各地に配置、領国支配を進めたといわれています。

村井家住宅 8

三戸駅の駅前通りに面してあり、国登録有形文化財に指定されています。製材業を営んでいた村井氏の住宅として大正12年(1923)に建てられた大正モダニズム時代の和洋折衷の建物です。

恵光院 9

名久井岳の中腹に位置し、創建は、建徳元年(1370)に長谷寺として開基したと伝えられています。

本尊の木造十一面観音立像は、平安時代の作と見られ県重宝に指定されています。また、永正9年(1512)に観光上人が奉納した順礼札や室町時代後期に推定される笈(ともに県有形民俗文化財)も残されています。隣接する長谷寺観音堂は、糠部三十三観音霊場第22番札所とされ、町の文化財に指定されています。

【天狗杉】 帯化に起因した樹梢の奇形が、天狗の座所を想像させて天狗杉の名をなしたものです。由来は明らかでありませんが、この杉は2代目天狗杉といわれています。胸高の周囲約4.1m。樹高 約35m。樹齢 約350年。県天然記念物。

法光寺 10

今から700余年前(鎌倉時代)北条時頼が、奥州行脚の旅にのぼった時、名久井岳の山容に魅せられて開基したという伝えがある曹洞宗の東北屈指の名刹です。境内にある承陽塔(三重の塔)は日本一の大きさで、曹洞宗の開祖道元禅師の御霊骨が祀られています。また、境内には樹齢約1000年、樹高約35メートル、太さ約8メートルの大古木「爺杉」があるほか、参道の千本松も圧巻の風景を醸し出しています。

【県天然記念物:法光寺参道松並木】

推定樹齢300年、樹高約20mのアカマツ23本が指定されたが、現在は、風害や伐採により19本となっている。延宝4年(1676)に12代住職や修行僧らが「般若心経」を唱えながらアカマツを1本、1本手植えし、その数427本を植えたという。これが「千本松」の名の元になった。 かつて1000本以上あったマツも、戦時中には根から油を取るため献木されたり、三重の塔の柱となったりして減ったという。昭和58年(1983)には「法光寺の千本松」が名松百選に選ばれています。

【県天然記念物:爺杉】

推定樹齢1,000年、樹高35m、目通り幹囲約8mの爺杉は土地を鎮め、村を守る神、鎮守さんとして崇められています。元禄15年(1702)と安永7年(1778)の百姓一揆の際には、爺杉と婆杉(ばばすぎ)の周りに集まって守護の祈祷をしたとの言い伝えがあります。婆杉は現在は存在していませんが、老朽のため伐採されたといわれています。